

# 建築に歴史をみる

藤田勝也

建築の歴史を知るうえで、現存する建築遺構は何より有難い資料である。しかし、その遺構は歴史の中で様々に変化したあとのあくまでも「現在」における姿であるし、しかも歴史に華々しく登場しそれぞれの時代においてきわめて重要な建築でありながら、故あって消えていった建築も数多い。そこで真に建築の歴史を知るためには、建築が現存するしないにかかわらず、文書としてあるいは絵図として記録された歴史資料が大きな役割を果たすことになる。中でもビジュアルな資料として絵図、特に建築を図示した絵図・指図、いわゆる建築指図は、読み取るべき豊富な情報を含んでおり、その価値は高い。

川上貢著『建築指図を読む』は、そうした建築指図をもとにして、いろいろな建築について歴史的考察を行った論文集である。本書は13編からなる。以下に集成された論文を順に列挙することでその構成を示そう。

「建築図面の変遷」「三聖寺伽藍古図について」「古絵図にみる禅寺の建築」「信州文永寺密乗院指図について」「竹内門跡屋敷指図について」「白川照高院指図について」「水口と永原の城」「禁裏付、院付の役宅について」「元禄期特権町人の居宅——銀座元年寄中村内蔵助闕所屋敷について——」「京都近世町家の宅地割と家屋平面」「近世における町と村の会所」「旧笹井家蔵『洛外図屏風』について」「幕末期における社頭景観の整備・再開発について——山城国西岡向日神社の天保度造営——」。

このように考察の対象として取り上げられた建築は、中世禅寺の伽藍・塔頭、寺院住房、門跡寺院、京都近郊の神社や、將軍宿館、御所付衆武士の役宅に関するものから、京都の特権町人屋敷、町家の宅地割と家屋平面の関係、さらに町と村の会所に関するものまできわめて広範囲に及んでいる。しかも、指図を主なよりどころとしながら他の多くの関係資料を縦横に駆使することで、単に建築だけにとどまらず、広く建築を取りまく時代背景が浮き彫りにされ、歴史における建築と社会の実相が多角的に解明されている。

本書に集成された各論は、著者が40年近い研究生活の中で出会った多数の建築指図との対話によって生まれたものであり、その対話の過程は、後進の研究者にとって資すべきよきテキストであると同時に、その対話の妙味は、建築指図を案内役にして、読者を知らず知らずのうちに建築歴史の世界へと誘ってくれる。

さて、その中で取り上げられていた町屋は、京都や奈良など古い歴史と伝統をもつ都市ではもちろん、多くの地方で見ることのできる

日本の伝統的な都市住宅である。その町屋の、特に京都における古代末から中世にかけての成り立ちの過程について、はじめて本格的に解明せんとした試みとして注目すべき本が出た。野口徹著『中世京都の町屋』がそれである。

全4章で構成される本書は、多大な成果を含みきわめて豊富な内容に満ち溢れたものであるが、とりあえず簡略にその概要を記そう。

まず第1章でこれまでの建築史学や歴史学における町屋に関する主要な論点を整理・検討した後、第2章で町屋の形成の背後にあっ

られた附属屋が京戸をめざす自立化の中で分割されて形成されたものである、という興味深い仮説を提示しているのである。

おそらく今後の住宅史・都市史研究に大きな影響を与えるであろうこの仮説に著者をして至らしめたのは、ひとえにその視点の斬新さによるものであろう。町屋が商いをともなう住宅であることを、私達は深く信じて疑わない。しかし、著者はそのような先入観をひとまず捨てる。そして、都市を構成する様々な建築の一類型として町屋を捉え直すのである。この発想の転換が、町屋の展開過程の解明というきわめて困難な、したがって従来手をつけられずにいた研究の目的遂行に大きく貢献しているのである。

その貢献の一つは、町屋と同じ建築類型に属しながらそれぞれ異なった機能を有する各種の建築——寺院の僧坊、中下級役人の家、門屋、棧敷屋など——に着眼することを可能たらしめたことである。町屋が建築史学の関心の対象となってこのかた、それは常に被支配者の居住する住宅として、いわゆる民家の一形式とみなされてきたのであるが、著者はそうした領域を越えて広く都市にある建築群の中に町屋を正しく位置づけたのである。

そして、それはまた、希少な関連史料の克服という効果をもたらすものでもあった。都市において町屋は量的に圧倒的多数を占めていたのであり、まさに都市空間を特徴づける重要な建築であったことは確かである。であるのに町屋は、あくまで町の屋、市井の家であり、庶民の家であり、無名の民の住まう家であって、めったに表舞台に登場することはなく、公の記録に記されることもほとんどない。もちろん固有の名称もなければ、居住者が誰なのかかわかることもないのである。したがって、たとえば公家や武家などの上層の住宅にくらべて、その成立期の実態を知るために得ることのできる史料はきわめて少ない、と私達は考えていた。町屋は古代から中世、近世、そして現在に至るまで確実にしかも継続的に存在しながら、なおかつその実態のとらえ難い厄介なものと考えていたのである。そうした町屋の成り立ちを考える際に、著者が純粋に建築類型の一つとして町屋を見直したことは、そこに新たな実態解明のための画期的な道を切り開くものであったわけである。

なお、巻頭には本書を遺著にして急逝された著者の業績ならびに本書の成果が稲垣栄三氏によって述べられ、また巻末には歴史学の立場から義江彰夫氏による丁寧な解説があった大変参考になることを付け加えておきたい。(日本学術振興会特別研究員・京都大学研修員)



た集住形式の考察を行い、町屋の形式が固有のものではなく、集住の目的を有する供給型住居一般の形式であることを示す。第3章で『年中行事絵巻』などの絵巻物や多くの土地家屋売買関係文書を博搜・整理して、町屋出現の基礎条件であるところの、平安京の都市システム〈築垣規定と行門制宅地割〉の崩壊過程を跡づけ、町屋の出現過程を明らかにする。さらに、第4章では中世鎌倉における町屋に関わる禁令の分析によって、第3章での考察内容を補強している。そして、特に本書の中核をなす第3章において、町屋は最下層の小さな小屋が集まってできたものではなく、小規模な供給型住居として垣のかわりにあて